

シュニトケ《オラトリオ「長崎」》日本初演によせて

秋元里予（ロシア文学者）

旧ソ連の作曲家シュニトケの《オラトリオ「長崎」》が、ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー指揮、読売日本交響楽団によって、まもなく日本で初演される。この一見、反米プロパガンダのような題名の作品は、58年、モスクワ音楽院の5年生だったシュニトケが書いた卒業作品である。作曲家自身と級友カラマーノフがピアノで連弾し、卒業試験の審査委員長だった作曲家スヴィリドフによって雑誌論文で高く評価されたが、作曲家同盟からは批判され、しかし、モスクワ放送の要請で、ショスタコーヴィチの推薦を受けて、ジュライティス指揮、モスクワ放送交響楽団、合唱団「鳥（プチーツァ）」によって演奏され、59年、《オラトリオ「長崎」》は日本に向けて放送された。その後、ソ連国内向けモスクワ放送で流されたが、コンサートではついで演奏されずじまいだった。それを復活させるため、ケープ交響楽団のセルゲイ・ブルドゥコフが、ロンドンのシュニトケ・アーカイヴに保存されている手稿スコアのコピーを、モスクワ音楽院とモスクワ放送に残っていたオーケストラのパート譜と照らし合わせ、演奏可能な形に復元し、2006年11月23日、第1回ケープ国際夏季音楽祭におけるケープ交響楽団による演奏で、《オラトリオ「長崎」》のコンサートでの初演を実現させた。2009年8月24日には、ロンドンのプロムナード・コンサートで、ヴァレリー・ゲルギエフ指揮、ロンドン交響楽団によって、英国初演が行われ、今回の日本初演はそれに続く形となる。

1976-77年に採録され、93年に出版されたシュリギン編「シュニトケの無名時代」の中で、シュニトケ自身はこのオラトリオについて、「このジャンルを選んだのは僕ではなく、上からの決定でした」と語っている。担当教官ゴルベフの勧めで、1956年創刊のソ連の年刊詞華集「詩歌の日」に収められていたソフローノフ作「長崎——悲しみの町」という、シュニトケ自身の言葉を借りれば、「あまりできの良くない詩」を基に作曲することになり、シュニトケはこれに島崎藤村の「朝」と米田栄作の「川よ とわに美しく」の露訳を加えた。当初は、6楽章構成だったが、第2楽章が削られ、5楽章構成となった。第1楽章 「長崎——悲しみの町」（ソフローノフ詩）、第2楽章 「朝」（島崎藤村・詩）、第3楽章 「あの苦難の日」（ソフローノフ詩）、第4楽章 「荒廃に立ちて」（米田栄作・詩）、第5楽章 「平和の陽」（フェレ詩）。演奏には大規模編成のオーケストラと合唱団が必要である。木楽器がそれぞれ4本ずつ。同様に多い金管の中でも、圧倒的なのがホルンの8本。大規模な打楽器群。ハープ二台。鍵盤楽器群は、チェレスタ、ピアノ、オルガンが使われ、これは後のシュニトケに特徴的なスタイルで、日本初演の指揮者ロジェストヴェンスキーは、これを「現代の通奏低音」と名づけている。

第1楽章は、映画音楽のような旋律で始まり、後に映画音楽を多く手がけるシュニトケの獨創性が既に見られる。続いて、「長崎——悲しみの町」という言葉が合唱によって反復され、寂寞とした描写——「長崎 悲しみの町／原爆の恐ろしき 廢墟の町／家ありしところ 粗末なバラック
／長崎／生き継ぐ者 忘れじ／轟音 凄まじ／^{ほのお}焰の円塔／憤怒 悲しみの町／長崎」

第2楽章は、ストラヴィンスキーを思わせる中国的な曲想。藤村の「朝」が使われ、第1連「朝はふたたびここにあり／朝はわれらと共にあり／埋れよ 眠り 行けよ 夢／隠れよ さらば
小夜嵐」は、殆ど原詩のままだが、第2連「陽は千切れ雲を 鞭打ち／音なき 言葉なき 声
／労働へと鼓舞しながら／谷間に響き渡る」と第3連「朝日を迎えに出よう／肩並べ陽を迎え
よう／ふたたび 陽が／われらのもとに」は、かなり原詩と異なり、特に「^{もろは}諸羽うちふる ^{くだかけ}鶏は
／^{のんど}咽喉の笛を吹き鳴らし」は「陽は千切れ雲を 鞭打ち」に変わっている。

第3楽章は、バッハの「マタイ受難曲」を思わせる曲想で、キリストの受難に原爆を投下された町の受難が重ねられる（あの苦難の日／原爆が音立てて飛来し／戦闘も 襲撃も 合戦もなく
／苦しみ喘ぎ 横たわる者 幾千）。シュニトケは、この楽章についてこう語っている——「このオラトリオに表されているのは、全て、擬人化された「死」——容赦なき、残忍な「死」、全く不条理だという点で野蛮な「死」——即ち、全て、非人間的で、ぞっとする、恐ろしいものなのです。」（技法の面で最も興味深いのは）恐らく、個々の音色の決定でしょう。例えば、その響きからして、かなり恐ろしいトロンボーングリッサンド。複数のトロンボーンが7つの調で絶えず混ざり合っていて、その唸りが飛行機のエンジンの轟音を思い起こさせます。それが、弦楽器の震えるような音と混ざり、また、全体のリズムの極度に無秩序な状態と相俟って、時にはぎよっとさせるような雰囲気醸し出しています」

第4楽章は、広島原爆を書いた米田栄作の詩「川よ とわに美しく」より、「荒廢に立ちて」と「川よ とわに美しく」の露訳が歌詞。詩人は原爆で亡くなった子を悼んでこの詩を書いたが、シュニトケがメゾ・ソプラノにこの楽章を歌わせていることで、ここには父親の声ではなく、亡き子を悼む母親の悲痛の声が聞こえる。この楽章では、シュニトケによると、のこぎりが使われている——「電気のこぎりがこだまのように女性の声を連れ去っていく——すると、周囲の全てが死んだようになり、こだまも生氣のない、非人間的なものとなります」

シュニトケの特色である「多様式主義」、より正確に言うなら「多様式技法」（露語では、「主義」を表す「～イズム」ではなく、「方法」を表す「～チカ」が語尾が使われている）は、端的に言えば、自分の音楽作品の中に既存の音楽作品を入れる手法で、第1には、弁証法的発展を生み出し、第2には、「普遍性」を表現する。別の時代、別の場所からもってきたものを並べることで、それ

らの共通点、その規則性、繰り返しが普遍性を示す。オラトリオ「長崎」の中に、藤村の詩と米田栄作の詩をロシア人の詩と並べて使ったのは、文学上の「多様式技法」である。米田栄作が書いたのは長崎ではなく、広島原爆であるから、オラトリオに描かれた「長崎」は統合的形象で被爆地を象徴し、原爆投下を許した人類全体の罪を贖罪する存在となっている。

第5楽章の「平和の陽」は、ゲオルギー・フェレが後からつけた詩で、シュニトケが「いかにもありきたりの決まり文句」と呼ぶその詩は以下の通り。「陽よ のぼれ、平和の陽よ のぼれ／見よ、山と森が連なる大地が／美しく光り輝くさまを／大海原の胸 息づくさまを／陽よ のぼれ、平和の陽よ のぼれ／人よ 世界中に呼びかける／火の海に沈む／長崎の悲しき姿が／人よ 肩並べ／一列に並び 顔合わせよう／この地上で／言おう／恐るべき／黒い／死に／「ノー!」と／人よ 全世界の／ 五大陸の人々よ／長崎があなたに救い求め／両手を伸ばす／長崎 悲しみの町が／あなたに呼びかける／正義と光のために立ち上がれと／命と幸福のために／平和と労働のため／長崎よ 思い出させておくれ／夜明けの光に輝く／大地の美しさ」

ここで、「黒い死」は原爆のことで、「黒死病」と言われたペストが念頭に置かれ、原爆が、一度に多くの人命を奪うペストに例えられている。「黒い死にノーと言おう」とは、すなわち、「原爆にノーと言おう」というメッセージである。

シュニトケの「長崎」から4年後の1962年5月、英国の作曲家ブリテンの「戦争レクイエム」が演奏される。第2次大戦でドイツの空爆により焼失したコヴェントリー大聖堂再建の献堂式で演奏されたこのレクイエムは、大規模編成のオーケストラと合唱という点で、シュニトケのオラトリオと共通点がある。これは宗教的鎮魂歌ではなく、作品のメッセージは、「戦争を二度と繰り返すな」という警告であり、この点でもシュニトケの「長崎」と共通する。シュニトケがオラトリオに込めたメッセージは「原爆を二度と繰り返すな」であり、「荒廃」と化した長崎が、再び、光を取り戻し、その長崎自身に、「夜明けの光に輝く大地の美しさ」を思い出させておくれという最後の歌詞は、長崎と、米田栄作の詩に書かれた広島、その2つの都市がある被爆国日本が、二度と原爆が投下されることがあってはならない、と世界にアピールする使命を担っているという意味を持つ。プラハ演説で「核なき世界」を訴え、ノーベル平和賞に選ばれたオバマ大統領が来日した11月、核廃絶の気運が高まる今、24日に生誕75年を迎えたシュニトケが51年前に作曲した《オラトリオ「長崎」》が日本で初演されることは、非常に意味深い。11月28日に芸術劇場で、続いて、30日には、オバマ大統領が長崎市長を始めとする日本人を招待して11月14日に演説を行ったのと同じサントリー・ホールで、《オラトリオ「長崎」》が演奏される。この不思議な一致に宇宙の意思を感じずにはいられない。